

犬の肝細胞性腫瘍 48 例の臨床・病理学的検討

二瓶 和美¹⁾, 山下 傑夫¹⁾, 加藤 静香²⁾, 内田 和幸³⁾, 小野 憲一郎¹⁾

1)日本動物高度医療センター、2) サンリツセルコバ検査センター、3)東京大学
獣医病理学研究室

【はじめに】 犬の肝細胞性腫瘍の病理診断については統一された診断基準がなく、Patnaik(1980)の報告では全て悪性であったが、広瀬(2014)は約半数が良性と報告している。これは犬の肝細胞性腫瘍の病理診断基準が予後に基づいて確立されていない事が原因と思われる。本研究では犬の肝細胞性腫瘍 48 例について、病理組織像と予後の関連について検討した。**【症例と方法】** 日本動物高度医療センターで肝細胞性腫瘍と病理診断した 48 例の予後調査を実施し、同症例の組織像を回顧的に検討した。病理検索は主に HE 標本による形態観察を行い、肝細胞索(細胞層、類洞構造)、細胞形態、核分裂像、浸潤性について検討した。**【成績】** 診断内訳は 48 例中、腺腫 42 例(88%)、癌 5 例(10%)、肝芽腫 1 例(2%)であった。生存期間中央値は腺腫 1027 日以上、癌 778 日以上、肝芽腫は多臓器転移により 167 日に死亡した。腺腫 42 例の予後は 1 例を除き良好であった。癌 5 例に遠隔転移はなかったが 3 例で術後に新たな腫瘍が発生した。組織学的に腺腫は肝細胞索が保持され、4 個以上の肝細胞で構成される部位もあった。細胞形態は正常肝細胞に類似し、核分裂像も稀であった。癌の多くは腺腫の中に悪性病変が混在していた。癌では肝細胞索は消失あるいは保持されていた。細胞形態は特に核の大小不同、形態不整、クロマチン量の不均一などの異型が認められた。核分裂像は腺腫と癌で有意差はなかった。浸潤性は動脈壁や他臓器への浸潤を有意な悪性所見と判断した。**【考察】** 当センターにおける病理診断は予後調査の結果と矛盾せず、犬の肝細胞性腫瘍の大部分は良性腫瘍と考えられる。病理診断においては組織・細胞異型が悪性度判断に最も重要であった。病理診断には正常部との境界に加え複数部位の検索が重要と思われる。